

新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会 第5回ワーキング部会

日時：平成16年2月17日（火）18：00～20：20

場所：KKR くに荘 4階会議室

1 開会

事務局（西川） それでは定刻になりましたので、新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会第5回ワーキング部会を開催いたします。事務局を務めさせていただいております商業振興課長の西川でございます。よろしくお願いいたします。

本日のワーキング部会の出欠状況ですが、井上委員、新山委員、佐々木委員のお三方が所用のため欠席と事前にご連絡をいただいております。また織田委員さんが若干遅れられるということと、私どもの山添委員が30分ほど遅れてまいりますけれどもお許しをいただきたいと思っております。

次に本日の資料でございますが、いつものようにお手元に資料リストをお配りしておりますのでご照合のうえ、過不足等ございましたら事務局までお申し出いただきますようお願いいたします。

それでは今後の部会の進行につきましては、若林委員長にお任せいたしますのでどうぞよろしくお願いいたします。

若林委員長 それでは昨年11月19日に第4回ワーキング部会を開催させていただきましたが、それ以降の経過についてご説明させていただきます。

前回のワーキング部会でご議論いただきました中間報告ですが、その後11月26日の本ビジョン策定委員会でさらに検討を進め、最終的な事務調整を進めまして12月18日に発表しております。同時に本ビジョン策定委員会として市民の皆様にご意見をいただくということで、市民意見とビジョンの名称募集を昨年12月23日から今年の1月22日までの約1カ月間実施しております。一方で中間報告につきましては商業団体や経済団体のほうで勉強会、説明会の場をつくっていただきまして、そこで直接ご説明、ご提案をさせていただいて意見交換を行っております。

それらを全部含めまして市民意見は65件、名称に関するご意見は5件お寄せいただいております。これらの市民意見の概要については後ほど事務局から報告させていただきます。そして今日の本題はもう一つの分厚いものですが、最終的には小冊子としてこの形ものがまとめられる予定です。あとでビジョン（案）の最終の内容を提案させていただいて、それについて集中的なご意見をうかがって終了ということで進めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは、まず事務局から市民意見の内容等について説明してもらいます。

2 ビジョン（案）の意見交換

(1) 事務局による市民意見の報告

（事務局による報告）

若林委員長 この件につきまして何かご質問等はございますでしょうか。

大島委員 この意見を寄せられた方の、例えば女性が多いとか男性が多いとか、何歳代の人が多いというような内訳はわかるのでしょうか。

事務局 匿名のものもありますが、基本的にはお名前、住所、年齢、性別を書かれていますのでそのあたりは分類できます。年代的には50歳以上の方が多くて、20歳代、30歳代は少ないのです。男女比でいいますと男性の意見のほうが多いという、大雑把なことでも申し訳ないのですがそういう状況です。

(2) ビジョン（案）の報告

（若林委員長による報告）

(3) 意見交換

若林委員長 これから1時間ほどにわたりまして、皆様からの活発なご意見をいただきたいと思います。

小出委員 欠席続きで申し訳なかったのですが、今回初めて出席させていただきます小出です。改めましてよろしくお願いたします。先生が説明されている間にざっと拝見させていただいて、大きな内容についてはとくに反対だというつもりは全然ないのです。商業者のネットワークの部分で、次の時代を担う若手商業者同士のネットワークが必要という部分についてはまったく賛成です。ただ、私自身が少し目から鱗のことがあって新しく私どもの店でも取り組むことにしたのですが、『京都の30歳』という雑誌をつくっている編集者の方をたまたま個人的に知りまして、その方がサラリーマンを対象に異業種交流会をするということで、弊社は対象外といわれていたのですが100人ぐらい集まったらいいと思っているということだったので行ってみたのです。

すると100人の予定が230人来られたのです。それに参加したときに、普通に働いている人たちが8時間拘束されて、残業が入ったりする、すると会社と自宅の往復だけで人脈が一切広がらない。ですから習い事をするとかスポーツジムに通うということは私的なことなのですが、お休みが不規則なサービス業者の場合はそういうことも続けられない。私自身もなかなか続けられないので、いかにそういう人脈に飢えているか、これはいけないなと思いました。たまたまスタッフ同士で四条通を考えるというものをやっていたので、若手の店長メンバーが集まる機会があったのです。

せっかくなので上ばかりが集まるのではなくて、経営者同士は結構集まる機会があるのです。逆にそういう人ばかりが集まっていると本業が疎かになるので他のことに目を向けたり、自分を磨いたりすることに時間を費やすべきだということが多いのですが、スタッフに関してはほぼまったくないのです。今自分のもっている友だち同士を友だちとして紹介し合うしか広がっていかないということで、これではだめだと思ったわけです。例えばまず四条通から、私の弟とかが幹事役で四条通の田ごとさんとイノブンさん、本来ならば外資系で関係ないというのが考え方だったと思いますが、メンバーが同世代であるということのを重要視したのでベネトンさんと、スタッフ同士で集まろう、20人ぐらいでやろうといていたのです。私のところのスタッフも全員行きたいといていたのですが、とりあ

えず今回は女の子だけにしたほど、やはりそういう機会がないわけです。

ここに個店の魅力がこれからの商業を支えると書いてあってまったく同意するのですが、個店の魅力の大きな部分はスタッフの魅力だと思います。スタッフのお客さんに対するサービスとか親切とか、ちょっと道を尋ねられたときに「こう行けばいい」と教えるとか、その商品ならこういうお店があるからそちらで売っているということをいえるか、いえないかで京都に対する印象が全然違います。残念ながら今は同じ通りで商売をしても隣の店でどんな人が働いていて、どんな商品を取り扱っているかは、自分がたまたま買いに行く店以外はまったく知らないのが現状です。まずはスタッフ同士が朝出勤してくる時間はサービス業だとだいたい一緒なので、働く近所の人同士が「おはよう」と言い合うような形の交流を積極的にやりたいと思って、そういう機会に私自身参加してそう思ったので今月の22日からやってみます。人数が非常に多くなってきて管理できなくなってきたので、次回に回るようにといているぐらいになってきています。

トップの人たちの集まりももちろん大事なのですが、そのように働く人たち自身の交流を考えるものを入れていただきたいと思うのが一点です。

それから営業時間について書かれているものがあって、私も買い物は好きなので営業時間が延びたほうがいいのですが、二つの点で私どもの場合は引っかかるので進めていないのです。

一つは、サービス業に携わっているのは女性が非常に多いので治安の問題があります。一人暮らしの若い女性が多いので危険になってくるといふこと。それから食事の問題です。開いているお店がないのです。とくにスーパーはなくて野菜などが取れない、ほとんどコンビニ弁当のような食生活になって、食事を楽しむということをよりいっそうできなくなってしまふといふこと。それから2交代制でやってしまうと、フリーターで働いているメンバーは1日8時間働くことによって例えば月に18万円とか20万円と稼げるのが、2交替になると確実に給料が減になってしまいます。その人が生活していくのが苦しくなるといふ問題があるので、このあたりは難しいかなと思います。

それから個人的なことですが、京都は文化発祥の地であるといふことで昨今たまたまですが芥川賞なども京都から続いています。前の京都大学の人から今回の若い人も、京都に関連のある人たちが小説だけではなくて短歌等もいろいろ活躍されています。それは京都というまちが都会だけれども適度に静かだからといふところがあります。人間は刺激に弱いので、気がつくといろいろなことに忙殺されて1日があつといふ間に終わってしまいます。店も適当なときに閉まってくれないと考える時間もなくなるので、その意味では文化的豊かさが減ってしまうかもしれないと個人的には思うのです。

なぜかといふと生活における調和のバランスを崩さないといふ営業時間を延ばせない。その営業時間に惹かれて来られるお客様も生活の調和を崩さないといふ楽しめないこととなります。商業者としては営業時間が延びていくことは避けられないだろうといふ覚悟はあるのですが、あまり長くないほうが四季折々とか時間、朝、昼とか、私はファッション業界にいるのでとくにそうなのですが、春ブーツが出てきて冬のサンダルが出てきてといふ形でポードレスのように季節が感じられなくなっているなかでも、京都はまだこの日になったら七草粥を食べるといふことを普通の家庭でも、一人暮らしでも、今日はあの日だからこれを食べようといふことが生活に根づいている部分があるのですが、そういうこと

を楽しめなくなるだろうと思います。

本当に追われる生活になるので、これから時代を担っていかなければいけない世代としてはあまり働く時間が長くなりすぎるもののかなということです。営業時間が延びると当然経営者が出る時間はそれに応じて伸ばさざるを得ない。どんなにしっかりしている人がいても任せきりにはできないのです。すると朝も晩もという本当に健康を壊すかもしれないし、食生活や他の趣味とかも楽しめなくなります。ですからあえて京都は、全国的な流れに沿いながらも違う道を模索していただければありがたいと思います。

これは現実的にできる、できないは別としてスタッフは出会いがありません。みんながあまりに参加するというので聞いてみたのですが、友だちにしろ異性にしろまったく広がっていかないという意見で、いかにそういう場がないか。そういうことを考えたときに、例えばゼストのような中心の場所にフードコートのような、給食センターのようなものがあるとか。1人分の食事をつくるのも結構大変なのです。食材も置いておいたら腐りますし、野菜を取りたい、バランスを取りたいとみんなそれなりに思っているのですがワンルームマンションのキッチンではつくりにくいとか、つくっても捨ててしまうとか、そういうことがあります。ですから、学食のような感じで近くの商業エリアの人がパス券のような感じで安く食べられて、そこでたまたま同席することによって食事をしながら知らない人たちと知り合えるような、巨大な給食センターのようなものがあつたらいいなと思います。

私自身がそうなのですが店が8時まで営業で精算して、会計をしてとやっているると9時か10時になります。そこから食事に行くと飲み屋さんしか開いていないので、普通の定食が食べられないということはどのスタッフも一緒なのです。何かそういう新しい発想で、京都は学生のまちでもあるので、学生だったときに得られた特権や楽しさをそのまま社会人になっても共有できるようなまちづくりができればありがたいなと、京都市さんをお願いしてみたいと思っています。

若林委員長 ありがとうございます。一つはまずスタッフですね。スタッフのつながり、ネットワークづくりというときに、商業者といっていましたけれども経営者ばかりに目を向けずにもう少し広げて、若い商業で働いている人たちが参加できるようにという視点は大事にすべきです。

営業時間のことは理想と現実といえますか、一方で営業時間が長くないような生活が望ましいと思いながら、一方で日常の生活を支えるという意味で、どんどん営業時間を延ばさなければいけないものも出てくるという課題が見えてきているということですね。

観光地の商業でもあまりにも早くお店が閉まっているという不満も出ています。日常の生活を支えるということと、観光地の商業という点では営業時間は調査研究すべきテーマだと思います。

来原委員 先ほどの発言で学生ということが出ましたので、一応学生なりの意見をいわせていただければと思っています。私も学生ですけども大学院生ということで、もともと京都産業大学で今は立命館にいますのでけれども、私自身、今京都産業大学のほうでサブゼミという形で大学3年生、2年生を対象として大学の先生と一緒に勉強したり、遊ん

だりという形でコミュニケーションを取るということを非常に大事にしています。これは私の考えではあるのですが、人がいちばん成長できるときは人と話しているときではないかと思います。それも同じ立場の人ではなくて、同じ立場であれば友だち同士でもいいと思うのですけれどもやはり年配の方とか、今私が注目しているのは年下の人と話すことです。

年下の人と話すと、私たちにとって常識であることが向こうにとって非常識であることが多々ありますし、向こうにとって常識的なことは私にとって非常識で、逆のパターンがあるのです。けれども非常識なことを非常識だけで捉えてしまうと物事の発想の転換はうまくいかないと思っています。あるときに知り合いの先生の飲み会があって、それは社会人の方ばかりが参加されるのです。もし、その会に来たかったら、来てもいいと誘いがきたらみんな「行きたい」というのです。いろいろな社会人の人と話したいけれども、その場がない。この人材育成というときに、そういう場の提供ということがここにも挙げてありますが、やはりそういう場を積極的につくる必要があるなと思います。

それとやはりそういう場には、その先生の考え方もあるのですけれども敬語とかは使いますが、学生と社会人が対等な立場で話をするということで、お互いを知るうえで大切ではないかと思っています。

若林委員長 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

小出委員 店舗とは関係なく個人的に面白いと思うのは、食の安全という点で認定をつくるというような文章を見てなのですが、最近、買い物をするときに何をつくろうかと悩むのです。私は食道楽なので1人で食べるときでもランチョンマットを敷いてきっちり食べないといやなのですが、食べるときに鳥は鳥インフルエンザがあるし、ウシはややこしいとか 認定マーク等が貼ってありますけれどもあのマークが信用できなくなっています。本当に少し高くてもいいので安全でおいしいものを食べたいというときに、それがわかるようなものというのはぜひしていただきたいということがあります。

それから昨日ですが「恋する京都」というドラマが始まって、たまたまCMの宣伝でそのまま続けてドラマを見たのですが結構面白かったです。京野菜をつくっている人が出てきて、京都でつくられるニンジンおいしいということが出てきたので早速ニンジンを買って食べたらやっぱりおいしかったのですけれども。そういう食料の自給率が日本は非常に落ちています。自分たちでつくってやっていく人たちをバックアップするような、また食文化は健康ももちろんそうですし季節を感じるものでもあります。京都の懐石料理でも私どものスタッフはほとんど食べたことがないようです。お造りが苦手という人も意外と多くて食べる習慣がないわけです。柔らかいものしか食べていなかったり、コンビニのお菓子とかばかりだったり、味覚が変わっていますのでいろいろな使い方も含めて、食べる機会をつくれたらなと思います。

例えば夏の鴨川の床も「行ってみたい」というスタッフも多いのですが、給料のそれだけの部分をかけて行く気はないようです。体験はしてみたいけれども自分のお金で行くのはいやという、高いというイメージがどうしてもあるからだと思いますけれども。実際それなりの値段です。床は稼げるようになってからにしてくださいということでかまわないと思

うのですが、もう少しおばんざいとは違って気軽に、敷代が高いということがあるのでそういう本当においしいものを食べられる機会をつくってあげられたらいいなという思いがあります。そして認定マークがあってそれがあって大丈夫だということや、それに対するホームページがあるとか。化粧品などは実際に使ってみた人の意見でいいとか悪いとかがホームページにたくさん出ています。ああいうもののほうが雑誌よりも信用度が高いイメージ、口コミ的な広がりがあるわけです。同じような形で携帯やネットを使ってできるようになったらいいなと個人的に思います。

京都は食の豊かな場所だと思うので、やっていただけたらなと思いました。

若林委員長 食の安全のことなどで事務局のほうから補足することなどありませんか。

事務局（西川） まだ発表するような段階では決していないのですが、頭のなかでもやもやしているような中間報告でよろしければと思います。

おっしゃるようによこのテーマの関係でいえば、トレーサビリティということがこの部会でも議論がありました。やはりウシとか肉ではなくて、野菜のような食材であればトレーサビリティのあり様もまた違うだろうと思います。食材の安全性の質が違うと思います。そういうなかで京都市が今まで長年取り組んできた京の旬野菜というようなものに着眼して、何かそれを団体旅館などとつなげないかなと思っています。私もよく飲みに行くので、いろいろなところで好き放題をいうなかでイメージをつくりつつあるのですが、旬野菜というのは1カ月、2カ月という期間があります。団体旅館の場合はお客さんが毎日替わるわけです。ですから1カ月の固定メニューができるということですとつながりやすいのではないかと思います。

京の旬野菜を料理しようとしてもそのときにはいろいろ他の食材が必要になります。そのようなニーズを、その間に例えば中央市場とかわれわれが今担当している小売市場というところが団体旅館さんのところに必要な量だけ、必要な種類をきちんとお届けできるようなシステムのようなものができないのかなと思うのです。

少しずつそこにちょっかいを出しつつあるのですが、本格的には4月以降とっておりますが、そのようなイメージをもっております。一度に現実的なものはできないのでしょうけれども、モデル的に生産農家と中央市場と小売市場、そして観光面での旅館というようなものがつながるのではないかと。案外つながりそうでつながらなかったのですが、少しずつ考えていけばできそうかなということを思っているという、非常に無責任な報告ですけども。

若林委員長 では引き続き勉強していただくことをお願いして宿題としたいと思います。お気づきの点があればどんどんお願いいたします。

小出委員 そのときはレシピも一緒をお願いします。スタッフにすぐきとか水菜とかいっても、「それはなんですか」というような感じで、おいしいといわれて買ったけれどもどうやって食べるのかということ結構いわれるのです。煮炊き物は面倒臭いというイメージがあるようなのです。入れたら終わりというイメージがあるのですが、すぐできるもの

がいいということだったので、例えば水菜は洗って切ってお豆腐に散らして、じゃこをフライパンでいためてドレッシングで食べるとサラダでおいしいとか教えます。それならフライパンだけなので、面倒臭ければじゃこをいためるのをやめてそのままふったらいいとかいうと、「それならおいしいかもしれない」というようなことです。仕事で疲れていると料理をする手間を惜しむということがあるので、一人前で簡単料理の食材が買えるものがあれば便利だと思います。

交通に関して書かれていた部分ですけれども歩けるまち京都ということで、町並を散歩するという習慣が日本は意外と少ないので、歩ける町並というのは素敵なことだと思います。その反面、これは食料続きになってしまうのですが食材というのは重たいわけです。野菜が好きなので野菜を買うと本当に重たくて、あれを持って歩いていられないと思うことがよくあるのです。本当に歩くまちになったらいやだなという思いもあるのです。キャベツ、大根、ニンジン、ジャガイモ等の根野菜類を買った瞬間に重たいわけです。それだけではなくてピン類なども、ポン酢とかドレッシングとかオリーブオイルを買うと本当に重たいのです。私はよくカートを引いて歩いているのですけれども。歩こうとしたら京都は面白いタクシー会社もあるので、タクシーをもっとうまく利用するような形とか。

もちろん市バスを運営されているのであまり言うのもどうかと思いますけれども。荷物を持っているときや、私どものところへたまたま通られた方が市バスの乗り方がわからないとか、目的地に地下鉄で行ったらいいのか、バスで行ったらいいのかわからないということで道順の問合せが非常に多いのです。スタッフもよくわからないのです。タクシーで行くと意外と近かったりするので、タクシーをうまく使えないか。観光するときに京都ならもちろんバスに乗って、歩いて、町並を楽しんでいただくこともできますけれども、海外のトロリーバスのような感じの乗り物の発想で、もっとタクシーで目的地まで最短距離で行って、できるだけたくさん詰め込む形で京都を満喫することができる。歩くときと移動するときにはあまり時間をかけないほうがいいという、メリハリをつけていただけたらいいなと思います。

その反面、市バスの渋滞が四条通ではとくに問題になっていますが、それについて素朴な疑問として「混んではいけませんか」ということを質問させていただきたいと思います。人間というのは不思議なもので混んでいるところに行きたいのです。空いていてスカスカ歩けるところにはたして本当に行きたいのかなということで、ゴチャッとしていて混んでいるから行きたい、並んでいるから並びたいという心理があるので、混んではいけませんかと思います。市バスがとろとろ走っているせいで市バスに乗っているお客様が窓から店舗を見て、店舗の例えば「セールを表示を見て、ここで降りた」といって来られるお客様もおられます。表面的に見たときは、ゆっくり走ってくれることもありがたいなという気持ちもあります。セールのときにセールを表示を見てバスを降りたというお客様が非常に続いたので、渋滞もありがたいなと一瞬思ったのです。

もちろんそういう理由ではなくて、普通に目的地に着く手段としてバスを利用されているお客様にとっては時間がかかって迷惑な話だと思いますけれども、そうではない商業を活性化するという点においては、バスはゆっくり走ってもらって、車もまちなかなので渋滞しても仕方がないので、店舗を見ることによって「今度行こうかな」と思いながら走るということはそれほど悪いことではないので、必ずしも混むこと自体が悪いという発想に

固まらなくてもいいのではないか。そもそも論に対しての反論になってしまうのですが、個人的にはそのように思いました。あとはタクシーを利用することによって高齢者も使える形とか、小学生等の低年齢層でも安心して行けるという謳い文句はいろいろできると思いますが、もう少し利用する方法を考えてもいいのではないかなと思いました。

若林委員長 交通問題が出ましたので、関連してご意見をうかがいたいと思います。四条河原町を中心とした都心部の交通問題、市バスの渋滞の話との関わりでいうと、にぎわってればさらに人は集まるというのはそのとおりなのです。

それに対して交通を規制して人がたくさん歩けるようにすることで四条通、河原町通、そのなかの細街路を歩く人たちのトータルの人数が増えるのではないかという意見があります。つまり総人数という発想で考えたときに、今回交通問題というのは都心商業の戦略を考えるうえで重要です。本当に人数は増えるのかという実験もしながらやらないとわからないといえわからないのですけれども、他のヨーロッパ等の地域におけるさまざまなケースを見る限り、自動車を規制したほうが道路を歩く人の人数は増えるというデータは出ているようです。

小出委員 個人的には、四条通に関してだけですけれども、停まっているタクシーさんを動かしてあげるといいますか。例えば今の四条通からどんどんお客を送り込んであげようシステムが組めて、タクシーが長い列で待っていない環境にできるような形にしてあげれば、それだけで相当スムーズに流れるかなと思います。原因の多くは待っているタクシーさんかなという気もします。タクシーさんも生活がかかっているのです、人が多いところでできるだけ待ちたいと思って当然です。どちらにとってもうまく、もちろん私たちも商売人なので損をするようなビジネスモデルを組みたくないわけです。むしろ一緒にうまく連携することでタクシーさんもどんどんお客さんが来る、四条はお客さんに感謝されて、循環的にどんどん回っていくような何かがつくれるようであれば取り組みたいと個人的に思うのです。

待っているタクシーが待たなくてすむように、次から次へとお客さんに乗ってもらえる。その代わりに、乗ってもらうためのサービスをそれなりにしてもらわないといけないという話はしないといけないと思います。態度の悪いタクシーさんもいますので、女性が安心して乗れるようにということもあると思います。そういう部分がうまくできればそれだけでスムーズに流れるかなと思うのです。先日、社会実験という形で四条も取り組んだのですけれども、トラックもどんどん荷物を運んで、もっとお客さんの荷物を運んだり、商店に荷物をどんどん入れられたりするように、さらにもっと活性化するような車がどんどん流れていけるような形にということであれば取り組んだほうがいいかなと思います。

若林委員長 タクシーの話もいろいろな意見もあると思います。タクシーが並んでいることで自動車が流れなくなっているのは事実なのですが、タクシーを追い出すほうが優先なのか、自動車を追い出すほうが優先なのかという議論はよく検討する必要があります。高橋委員さん、実験もございましたしお願いします。

高橋委員 交通社会実験ということでやりました、その前に行った駐停車の現状調査では停まっているのはほとんどがタクシーなのです。3分の2がタクシーでした。あとは自家用車とかです。タクシーがいちばん大きな問題です。それから一般車両で四条通に来るよりも、あの道を通ってどこかへというものがほとんどでした。ですから、そういう事実を今後どのように解釈していったら方策につなげていくかは、これからの交通問題の課題ではないかと思っています。

私も最初は、混んでいるのはにぎわいだから混んでいるとかいろいろ言っていたのですが、実際にそういうデータを調べていくと、ほとんどが通過車両なのです。お客様を運んでくるのはもっと別の道があるのだろう。タクシーもありますいろいろなありますが、やはり歩行者空間をきれいにして、もちろん通りやすくするとかそのような形でいろいろ研究していけばいいなと思っています。先日の交通社会実験は内閣府の特別調査予算がついてできましたけれども、何でやるにしても人件費とかいろいろ高くなります。できるだけ今後も頑張ってやっていきたいと思っています。

若林委員長 おっしゃられたとおり、実験をしてデータを確かめていくことは非常に大事なことです。私の見た感じでもやはり市バスで来ている人のほうが断然多いと思います。帰るのも市バスとか荷物が増えたらタクシーということが多いのです。一般車両で来て駐車場に入れて一般車両で帰るといった都心部への流入、普通の消費者が多いと思えないのです。逆に四条通は一般車両こそ交通規制して、タクシーが便利になるようにしたほうがいいと思ったりもするのです。これは素人の発想で実験しないと、総合的な交通政策というのは下手にいじると大変なことになりますから思いつきの範囲ですけれども、一般車両の人が便利にという議論は違うのではないかなと思っています。ぜひそれは今回の交通実験の成果に学びたいと思います。

逆にいうと今後の展開のなかではそういう社会実験のようなものを京都市や、あるいは他の府、国も応援することで、こういう一つひとつの施策を具体化するということが大事なことです。これからの施策の展開においては実験のようなやり方は重要なのではないかと思います。ありがとうございました。

和田委員 上手にまとめていただいて何もいうことがないといいますが、小出委員さんがたくさん話されたという感じがすけれども。少し書いてもらっている内容で、商店街でもなく、小出委員さんが先ほどいわれたような組織も非常に大事だと思いますが、まちを考えたときに商店街で何かをするといったときにいちばん問題になるのは、足並みが揃わないということだと思います。そういうことを考えたときに商店街とか何々ということを一っさいやめて、「これをする人この指とまれ」というようなことをしたときに、そこをできるだけ応援してもらえよう組織のつくり方を学ばせてもらえるものとか、例えば事務局のお手伝いをさせていただけるとか。いちばんの問題はみんな仕事をしているのに加えてもう一つ横で仕事をするのですから、そこで何かをしるといわれてもそれは無理ということになって、それこそ何かするなら店を閉めてから夜中に集まって、KICSの方々もみんなそうですけれどもそのようにやっていただいて、そこに事務局の用事までしろというのは無理だろうと思います。

そういうことも書いていただいていますけれども、柔軟にいろいろなことをやりたいというところに手を差し伸べてもらえるというとおかしいのですが、そういうことをサッとやってもらえたら非常にありがたいと思うのです。それがはたしてこれのどこに当たるのが今ちょっとわかりませんが。

若林委員長 商店街振興組合を対象とした事業というのは、今までの基本の組立てに対してすでに任意団体としての商店街に対する補助を行っています。この間、さらに商店街という名称ではなくても今のお話のとおり、商店街有志というようなものについても今後の行政の施策の応援の単位として緩やかに考えていきたいと思えます。それぞれの地域のご事情ですから、その事情を踏まえてできるところから、頑張れる人から頑張ってもらい。そのように行政も柔軟な施策転換へ一歩踏み出すというのが、「5つの転換」の1番目、あるいは5番目等々、そういう展開につながると思えます。

松井委員 小出委員さんの元気な、面白い発想がとても新鮮で面白く聞かせていただきました。たしかに働いている立場から住みやすいまち、働きやすい商店街という見方は非常に大切なことになるなどお聞きしながら考えていたのです。全部が帰って、それからご飯をつくって食べないといけないということではなくて、そういうことができるのであればそういうことをやってくれる地域のお店にあたってみるとか、そういう働きかけで一つずつできていって自分たちの暮らしがもう少し満たされる、いいものになってくるという形ができてきやすいのではないかと思います。

商店街全体でどうしよう、こうしようというのはなかなか難しいわけです。私たちのように環境団体のNPOでも、みんなが足並みを合わせてやろうといっても絶対にできないです。「これをやるから一緒にやりたい人は寄りませんか」という呼びかけをすれば何人か人が集まってくるのです。そういう形で行事をすると結構スムーズにいったって、みんな面白がってやってくれるということがあります。どんなことをやっても結構人が集まってくるのです。ですからその人が欲しているものは他の人も欲している可能性があるわけです。ですから、そういうことがまた違う方向性の利益を生んでいく形にもなっていくわけです。非常に面白くて、どんどんそういうことを動いて進めていかれたらいいなと思えます。

乗原委員さんがおっしゃった学生さんのイメージから若者も、京都は学生のまちですから学生がもっと住みやすいまちになっていいわけです。その意味でどんどんその地域の大学の周りから変えていこうという発想で動いていかれても、それもいいことではないかと思いました。自分が住んでいるところから動き出したらいいわけです。環境団体でも大きな環境団体がありますが、中心になって動かしているのは3人です。本当にみんなそういうものなのです。大きな団体でも上のほうで話をしていただいたい決めていく、決定権をもって動かしていける人は3人集まったら動いていくのです。その3人が何人か連れて動かす。3人同意して「やろう」という人がいれば動き出せます。「いいな」という人が3人いれば「これはいける」と考えるわけです。

そういう発想でどんどん働きかけをしていけば、それにつながっていけるということが非常にあると思えます。ぜひ頑張っていたら、その地域が動いて変わっていくので

はないかという可能性を感じました。

それから私は環境団体ですのでいろいろなことを考えているのですが、京都の中心地の祇園祭を中心としたまちの一つの関わりです。これはぜひ頑張っていたきたいと常々思っています。祇園祭は環境の水のほうから考えても、長年の水質汚染の問題で疫病が起ってそれで祇園祭がずっと栄えてきたわけです。やすらい祭りもそうですけれども、みんな病気、疫病を防ぐためにやってきたお祭りです。環境祭なのです。京都は長年これだけ祇園祭をやってきて冬でもやったそうで、雪が降っているときでも祇園祭をやったという歴史があるのです。ですからそのイメージからして、これだけまちの人が大事に守ってきたお祭りは本当に世界に誇れる、素晴らしい祭りです。これは地域で、先ほどいわれた祇園から大宮あたりまでが祇園祭の地域ですけれども、そのあたりはいつせいにやっていく。

環境にいい祇園祭というのができないかということを経験団体で今考えています。使い捨てパックを使ったりしないとか、そういう形の動きも出てきています。商店街などともそのようなところで手をつなぎながら、他の人がより京都らしいな、いいなと思ってくださるような祭りにつくりあげていければ本当に素晴らしいことだと思います。歴史学者の先生にも、祇園祭は環境祭だという言い方で位置づけていってもらえないかといって一生懸命仕掛けているのですけれども、そういうことも考えております。

そして先ほどの交通のことですが、私が常々思っているのは環境問題をやっているのにいちばんのウィークポイントは車で、車がないと生活ができないというくらいあちこち車で走り回っているのです。いつも思うのは烏丸から河原町、そして四条から御池までの間はなくてもいいと思っているのです。自分が通っていていつも思うのですが歩く人の邪魔で、気の毒だと思つたのです。御幸町も、先ほどおっしゃったように三条通も非常に活発ないい動きが出てきました。その間のまちが活性化して元気になってきています。そのところを車で邪魔されます。錦が歩いている人を止めて車で突き抜けていけないわけです。これは車を運転していて、いつも悪いなと思っているのです。このぐらいの距離のなかは十分に歩ける距離です。お年寄りのことは考えないといけませんから、全部の通りが動くのではなくて何本かぐらいは通れる道をつくっておけばいいわけです。そのぐらいの距離のなかで考えられることはいろいろなことがあると思います。

施策としていろいろおっしゃって、四条繁栄会さんもいろいろやってこられたように交通の実験をどんどんやってみればいいと思います。こういう車の流し方をすればよかったとか、悪かったとかがたくさんあると思うのです。これだけの狭いまちのなかだけの話です。どんどんやっていたらいいと思います。京都のまちなかの自転車の使い方も少し考えて、どこか停められる場所もいろいろまちなかで動かしていけばいいのではないかと思います。観光客の人も自転車で回れるという形とか、また学生らしいイメージもします。京都は自転車で十分回れるまちです。そういう形で観光客の人にも楽しんでもらえるし、地域の人も乗り捨ての自転車で、ステーションを決めておいて行ったところで乗り捨てるといふ形にすれば、重たい荷物を買ってもそこで自転車を借りて、また自分の近所で乗り捨てて帰るといふことも可能ではないかと思つた。

若林委員長 ありがとうございます。松井委員さんのお話をお宅までうかがいに行つてわかつたのですが、なんでもかんでも京都の話は水の話になってしまうのでびっくりしま

した。祇園祭も環境祭だそうで、そうだったのかと私も非常に勉強になりました。そのときにうかがったのですが、水と商店街のつながりは非常に深いものがあります。その意味でやはり NPO は NPO のよさを生かして、都心部や都心部以外のエリアでもご活躍いただいて、適宜商店街の方々と仲良くやっていただいたらいいなというイメージを本ビジョンでは描いています。

永山委員 この「11の戦略」ですが、ビジョンということの意味を解釈すると京都市さんと商業者と生活者で今後ともやっていくということだろうと思います。私は伏見のほうで TMO をやっていて正直を申しあげて本当につらいのです。これはそれぞれがこういう形で、例えば商業者が夜の 8 時までやって、昨日も 8~10 時ぐらいまで会議です。毎週定期的に行っているのですが、そういう話を聞きながら交通にしても店舗活性化にしても、いわゆるコンセンサスを得て温度差を縮めていって地域の活性化を図って、最終的にはその地域に絶対量、パイを増やしていくということだろうと思うのです。誰が面倒を見てやるのかということなのです。やはりボランティア精神も、ボランティア精神でいいのかどうか分かりませんが長くは続かないというのが直観で感じます。

私自身も本業を抱えてギリギリの状態です。保険も何もないわけですが。それでも地域のためにやっというときに、TMO というのは私自身が思うのは、端的に経済産業局の人が熊本や宮崎から来るのですけれども、要するに人を見つけたら 7 割成功する。それをうまく仕立てていく態勢が地域に、行政にあるのか。これができれば、こういう不透明な部分も含めておそらくいくのだろうと思うのです。私はそれが壁に見えるのです。

たしかに私の商売は企画・デザイン業ですが、スタッフに女性が 3 人いますが、3 年ほど前からテレビ局のアナウンサー、新聞記者で小出委員さんがおっしゃったように異業種交流をさせています。すると幅と深さが伸びていくのです。それは自由業なので時間の融通はきくのですけれども、商業者の方は私自身も地元の商店街の若い方と話をすると毎日朝起きて、商売をして、店を閉めての繰り返しですから人間の幅は縮まります。他の場で勉強することは大事だと思います。けれどもそれさえも、そういう気がある人を巻き込んでいく方法はたくさんあるのですけれども誰がチェアマンになってやるのか。常に「誰が」ということが壁になってくるのです。今回これを見ていて感じるそこなのです。

私自身も淀川で国土交通省の河川レンジャー隊ということをやっているのです。初めての試みで河川流域の市域、環境整備の人育てなのですが、今一生懸命やっている方法は地元の子どもたちを十石船に乗せて、船からの景色、景観を描いて、その話を家でお父さん、お母さんと話そうということなのです。それと河川掃除もやろうとしています。それでやっていくときに、それこそ私 1 人でやっていたらつぶれますので、地元の大学生たちにやってもらえるような仕組みをして、国土交通省はそれに予算をつけてくれる。人づくりに予算をつける。ですから今は不安定なのですが、これから参加していけばやはり続くと思います。人に対する経費を非常に大事に思っているというのは感じました。私を感じているところはそういうところでは。

若林委員長 TMO を全国的に展開されているところのうまくいっているところ、うまくいっていないところというようなあり方についての中小企業庁の報告書が昨年まとめられ

ています。そこでも中心的な担い手がいるか、いないかが非常に大きなテーマになっています。今回も 30 ページの「5 つの転換」の「ネットワーク化と人材育成へ」のところ、商業者リーダーと商業コーディネーターと書いています。リーダーが登場してくることが基本だと思っていますけれども、ボランティアではなくて専業で、専業でなくても兼業でもいいのですが、商業コーディネーターがなんらかの職業で関わってくる、育ってくることも大切ではないかと考えています。

時間が来つつあるのですが、大学のまちとか学生という話がありましたので、例えば「11 の戦略」を今後考えていくときに、行政のなかだけの知恵だけではなくて、今後とも大学、学生の関与ということが、11 の具体的な戦略を展開していくには非常に重要な役割を發揮されるのではないかと期待されることです。大学というものが重要な経営資源であると思うのです。そういうことも含めて何かご意見、ご感想がございましたら、いかがでしょうか。

遠州委員 学生の話をして廊下で立ち聞きしていると発見することが多いのですが、京都が好きでわざわざよそからやって来たという学生が多いのです。京都なら行ってもいいという形で送り出してくださる親御さんがいるのです。そういう学生が就職するときになんとかして京都に残れないかとよくいうのです。8 月ぐらいまでは京都にぶら下がるという方途を求めているのですが、最後は時間切れアウトで、とくに女性などは京都では仕事が見つからないので、生まれ故郷に帰っていくというパターンで卒業する学生を何人か見えています。京都に残れるような、そういう仕事をもっと増えないのかなということをいつも思っています。

それから単に抽象的に好きというだけではなく、今回最後のところに付録で付くことになると思いますが、大学コンソーシアム京都のプロジェクトで佛教大学の学生が北区の商店街を走り回って、下手をすると 60~70 人ぐらいが走り回ることになったのではないかと思います。ずっと継続してやっている人は 4~5 カ月ぐらい調査をしているのです。当たり前のことだと思っていたことを発見して帰ってくるのです。例えば商店街の人たちに「何が足りないのですか」という話をぶつけると、駐車場が足りないといわれるのです。私は何となくそれは違うだろうという感覚をもっていたのですが、学生が調査をしてくると、やっぱり違った、駐車場にずっと 1 日中立って見ていたけれども 4 カ所ぐらいあるけれどもいつもガラガラだ、パーキングに入れられないというわけです。通過交通はたくさんあるけれども車で商店街に来る人はいなくて、都心ならいざ知らず、周辺部分の商店街ではほとんどが駐車場問題ではなくて駐輪場問題なのです。非常に混んでいて 1 日見ていると商店街の人の意識のズレを感じるという報告があって、私はやはり直感が当たっていたと嬉しくなりました。

学生は面白いと思うとずっと立っていることができます。私たちにはなかなかできないのですけれども。おばちゃんが自転車で行きはパッと乗ってくるけれども、帰りはいっぱい荷物が乗っているのあとをついていけるという話をするのです。そういう機動力があって、興味も関心もあるのだけれどもなかなか落とし所がないのです。商店街の人に「何かお手伝いを」といっても、こういうことを一緒にしましょうという話になかなかないかなかったり、私たちも一方で授業で追いかけていけないといけなかったり、できたら

資格も取りなさいということをお願いします。

そういうところで学生のエネルギーを京都のまちづくりで、うまくいけば最終的には仕事ができるような動きにする場所がほしいと思います。そういうことがささやかだったと思いますが、今回コンソーシアムによって学生の細かい研究を中心にまちづくりを中心にいろいろまちを発見していこうというのは面白かったわけです。できればそういうことが恒常的に動いていって、商店街ではすぐに役に立たないかもしれませんが回り回って役に立つし、学生も面白いだけではなくて仕事も拾って帰ってくるというような、そういう面白いまちになっていくと実は常に新しい人材が供給されるということになるのです。これは全国でも意外と少ないのです。学生が集まる場所は非常に少ないのです。地方大学ですと国立大学でも非常に厳しい状態になっているという話をたくさん聞きます。

京都というのは、京都という名前前で学生が来て、できれば留まりたいというのならそこを生かせる。その場所が行政も、地域でお仕事をしておられる方も、店主さんもうまく場所づくりができるといいなと抽象的に思っています。

若林委員長 今回は大学コンソーシアム京都のほうに委嘱した経過が、大学側で好きな商店街を選んで行政がマッチングしてそれを実現しました。逆のパターンもあるのです。商店街の側からお願いをしてというケースもあります。さらに商店街ではなくて商業者がお願いするケースもあるでしょうし、今回はとくに大学の研究室が単位でしたけれども、代表としてもっと大きなプロジェクトという場合もあるでしょう。最近では学生のサークルのようなもので、経営コンサルティングのようなことをテーマにしているところも登場してきています。大学といってもいろいろですし、商店街といってもいろいろなのです。どちらがイニシアティブを取ってするかを含めて、そういうものをいろいろマッチングしていろいろな形で応援をすることが求められていると思います。

そういうことはお互いに断るといってケースも少なくないようで、ある意味では異文化交流です。異文化というのは衝突を伴いながら理解が進んでいくのでその点はやむを得ないと思いつつ、今後とも行政の施策としても応援していくべきことです。

織田委員 研究者レベル、研究室レベルでは京都はもちろんまず大学の数が多いですし、そういう専門校もたくさんあります。全国のなかでもかなりお手本にするところが増えてきています。新聞を見ていても、私も今山科でやっていますが、あっちもこっちもやっているという感じでゲリラ的には進み始めていると思います。ただ、もう少し大学の組織的なもの、あるいはシステムのところまではまだなのでこれからの課題だろうと思います。今回のビジョンのなかではかなり意識的に位置づけられているので、これには満足しています。

ただ、組織的という話と絡むことでいえば、私の個人的な見方ですが学生というのは三つの属性をもっていると見ています。一つはキャンパス内で学ぶ学生というのが一つです。それから4年なら4年、大学院に行けばもう少しありますが、そのいちばん多感で知性、感性が伸びてという時期に、キャンパス外の地域社会で生きるという生活者としての学生。三つ目は世の中の矛盾や問題点に非常に敏感な時期ですし、かつての学生運動の時代がそのピークだと思いますが、そういうことがあるので改革者、提案者としての学生。この三

つがあります。私はキャンパスで学ぶというコンソーシアム・システムは、京都には世界に冠たる仕組、ファームがあるのですが、あとの二つについてもう少し面白いシステム、仕組ができないかと思っています。

京都の学生たちにフィールドで生涯学習をするシステム、そのなかのプログラムの一つにこの商いの世界は非常にいいと思っていて、大学生のみならず学ぶ学生たち、幼稚園はちょっとしんどいでしょうから小学生からを含めて、徹底的に教育の世界とこの商いの空間なり仕組をどこまで融合化させられるか、くっつけられるかをずっと問題意識をもっているのです。ただ、一気にはいかないので、ここに書いてあるように学生がどんどん商店街でビジネスを起こして成功することは夢のまた夢でしょうが、しかし中・長期的には京都ならできる、面白い方向づけで可能性はあると思っています。そういう取りかかりをふんだんに入れてくださっているのはこれは実践していこうと思います。

改革者、提案者というのはまさにそういう場面をたくさんフィールドで用意してあげてほしいと思います。世の中が変わるときには非常に敏感に、革命的なことをやるのが学生たちの潜在能力です。今でも学生運動のときのようなことはないにしても、クリエイティブなエネルギーの出し方、提案者、改革者としての学生の使い方というのをもっと追い込んでやっていきたいと思っています。そういうことを思っていますので、大学は大いに地域と絡むべしということで可能性を追いかけたいと思っています。

若林委員長 ありがとうございます。芽は出ていますが学生や大学のもっているパワーを生かすのは始まったばかりといえますか、まだ潜在的な可能性があると思います。それを商業に生かすことができますし、そういうことを通じて今のお話をうかがってもわかるように大学の研究や教育機能をアップすることが可能だと思います。大学の戦略としてもかなり戦略的、実験的な課題ですけれども、今後、行政施策としても十分位置づけて応援ができればと思っています。

小出委員 言い出すときりがないのでもう一言だけ申しあげます。何をやるにも本当にお願いなのですが、場所を提供していただきたいと思っています。40人以上の規模になったときに使える場所が本当はないのです。とくに晩9時以降だと居酒屋さんではうるさいので会話になりませんし、20人ぐらいまでしか無理なのです。40~60人ぐらいの規模になってくると使う場所がなくて、商店街事務局も40人以上入る規模のあるところは少ないのです。ぎゅうぎゅうになってしまうので、ちょっと何かやろうと、例えば今私がさせていただいているKICSのほうだと、各商店街から代表が集まってくるだけで50人になってしまいます。すると本当に場所がないのです。

できれば24時間使用可能な形、今日も実はこのあと夜に会議があって、明日もそうなのですが夜の8時とか9時から、だいたいいつも9時からなのです。先ほどのスタッフで集まるものも商売が終わってからのので9時半スタートなのです。それぐらいになってしまうのですが12時ぐらいでお店が閉まってしまうので、うまくいけば12時で終わる場合がありますが、下手をすると3時とか朝近くとかになってしまうので24時間使用可能であってほしいというのがリクエストです。それから規模は60人クラスで入れるということ。それからホワイトボードが使える、スクリーンがあってパワーポイントが使用できる環境、

コンピュータが使える、オンラインでネットにつなげるということをぜひしていただけたらいいなと思います。

KICS もエスカイヤクラブで会議をしていることが多いのですが、エスカイヤクラブというのは会員制があってお金持ちが飲んでいるようなイメージがあるなかで、無理やりスクリーンを持って行って、パソコンを全部つないでスクリーンを見ながらやっているのです。配置も全部そのときどきで換えてやっているのが大変なのですが、いつもただ無理をいって使用させてもらっている部分があるのです。そういう場所を安く提供していただければ大変ありがたいと思っています。

商店街に関して、例えば説明会をするのでもホテルを使用すると非常に高いのです。100人クラスになるとホテル使用でないと無理なのですが、商売柄、生鮮食品とかお花とかのところは、朝は市場へ行くので夜しかだめとか、その逆に飲食の方は日中なら出られるけれども夜は夕食時とかになるのととても無理という形です。すると午前の部と午後の部と2回説明会をやらないといけないので、1日中ホテルの部屋を使用しっぱなしになってそれだけでも巨額のお金が動きます。何か場所提供をしていただくことを検討していただければありがたいと思います。24時間可能ならベストです。飲食ができればさらに最高で、持込可で食べられると本当にありがたいです。みんな会議をしながらそこで夕食を食べるので、そうなったらありがたいなと思います。

二つ目は学生さんの話が出ていました。私どもは四条通御幸町角に店を構えていて、祇園祭風の変ったビルの形をしていますので、学生さんでデザイン系とか設計・建築関係の方がわりと来ます。

私自身が学生時代にイベントをやって、滋賀の企業さんから現金で20万円、現物支給で20万円、合計40万円を集めて外国の学生を集めてイベントをやったことがあります。そういうことで学生にはできるだけ協力をしたいといつも思うのですが、学生さんにぜひお願いしたいのは学生さんはアポイントなしなのです。中小企業の商店主というのは非常に忙しいのです。たくさん雑用があって、商談もたくさんあって、電話も山盛りあって、処理しなければならないことが非常にたくさんあるなかで、すみませんがポスターを置いてくださいとか、こういうイベントをやるのでお金をくださいというものから、建築のこういうテーマで研究しているので撮影させてくださいとか、外観がどうなっているのか説明をうかがいたいとか、全部アポイントなしで来られるので、予約を入れてほしいといつも思います。

そういう形なら例えば大学と協力をして、毎月は厳しいので3カ月に1回とか、商店街がこの月のこの曜日の何時から何時なら飛入り営業してもらってもかまわないということであれば、できるだけそのときは協力をしてあげたいと思います。せっかく答えてあげたいと思っていても出張でいないということも多々あります。また連絡してあげないといけないというのも結構大変なのです。そういう形でスケジュールを決めてしまうとか、できればアポイントしていただけたらありがたいと思います。

三点目は環境の話がされていたのでできればやっていただきたいというのは、COP3とかタクシーの排ガスの関係はもちろんなのですが、四条通はヒートアイランド現象が非常にきつくて真夏は痩せそうなくらい暑いのです。ですから緑化をやっていただきたいということ。カナダなどはブッシュレンジャーという形で、ネイチャーゲームとかアメリカなど

ではよくあるのですけれども、例えば水に対する知識をずっと体験できるのです。カナダかアメリカかどちらか忘れまされたけれども、ブッシュレンジャーで体験をするときにはそれを守るのに経験を積むことによって、そのうちの3分の1ぐらいの人が将来そういう仕事に携わっていったり、あるいは携わらない人もそういうことに対して非常に前向きに協力的になったりということもあります。小さい子どもさんのときから、学生のときから何かそういう環境の体験型のものを企画していただければいいと思います。

それは先日テレビでも放映していたのですが継続的に何年かかけてやって、認定証のようなものをもらって、そこで学校のクラスメイトとは違う友だちもできるということで、子どもたちにとっても刺激があって面白かったということです。私自身も小さい頃からいろいろなところで一人で旅行に行って、いろいろな人たちと友だちになったことが大きな財産になっています。そういうことをやらせてもらえたら、京野菜の体験等も同じだと思います。農業や自然とふれあうようないろいろなものをされていますが単発企画なので、そのときだけではなくて、何年か継続したことによって一つ確実にものになる。これについては非常に詳しい、水については非常に詳しい、土について非常に詳しいというようなコース的な認定できるような体験型のものをやらせてもらえたら面白いと思います。

四つ目は自転車なのですが、スタッフは店まで自転車で通ってきます。駐輪場にいつも困っているのて近くに駐輪場を確保していただきたいのです。駐輪場がなければスタッフは無断にどこかに停めています。スタッフのなかには近くのマンションに住民のふりをして停めている人もいます。大家さんにも「おはようございます」と挨拶して、大家さん自身もわかっているようなのですが諦めているような、そういうスタッフもいます。駐輪場があればありがたいと思います。本当に自転車で通う人が多いのですが、御幸町通は車がガンガン走りますので非常に危ないエリアです。駐輪の問題と車についても実験でやってみたら面白いかもしれないと思っています。

これは以前、先生に少しお話したのですが、個人的なリクエストですけれども、私はアメリカの高校を卒業しているので、大学時代に先生にいわれて外国人留学生たちの家庭教師をずっとやっていたのです。社会人になってから海外経験を生かせる機会がいっさいなくなってしまったのです。海外に長期滞在、短期滞在といろいろあると思いますが、卒業した経験があるとか、そういう人たちが集まれる場所、交流できる場所があるといいなと思います。今は私どものお店に直接来られる外国の方の通訳とか、たまたま入った店で困っている人の通訳とか、そういうレベルで使うだけです。実際に住んで、そこで生活したからこそ見えるようなよさを話し合う機会、もう一度考え直すような機会がないので、海外留学、滞在した経験のある人たちのための交流の場所をつくっていただけたら大変ありがたいと思います。

若林委員長 ありがとうございます。場所のお話と、困りますというお話、環境のお話、駐輪場のお話、海外の滞在経験者の交流機会というお話。これは年齢はどうも上の方のようですが、今日の京都新聞を見ていると、京都に来る海外観光客に観光通訳ガイドというようなことを年齢がかなり上の人たちが頑張っているようですが、そういうボランティアの取組もありますね。

小出委員 そうではなくて、外にいたことがあるからこそこのまちをどうしていきたいかというような、真面目に話せるような場所があるといいなと思います。

若林委員長 田中委員からまとめの発言をお願いします。

田中委員 別にまとめではなくて、あくまで今日はワーキング部会の最終日ですから、この報告書の内容をどう考えるかというのが大前提だと思います。

目次と本編とがまだ修正できていないところがあります。例えば残店舗が目次では残っていますので、そういう点は策定委員会に出されるにあたってお忙しいと思いますがチェックをされていくことが必要だと思います。それからとくに永山委員も挙げておられますが、リーダーをどうしていくのかということで、これはつくろうとしてくれるものではないです。自然にできてくる部分と、それから可能性のある人に対してコーディネーター的な方がより支援をしていくということがあろうと思います。その場合にやはり先ほども場所の提供の話も出ておりましたが、より具体的には場とか機会、それから資金等の話も出ました。そういう提供を通して、行政ができることは環境をつくっていくことですから、今後そういう点は「誰かを」という個別の問題ではなくて、そういう人たちが育つようなシステムを周りのほうからつくっていただくことが必要だと思います。

もう一つは、どういう報告書をつくっても個々人の考えておられる部分と全部それが納得できることはないわけです。しかもこれは企画書という形になっておりますので、この企画書を最終的に若林委員長がお書きになるなかで、やはり具体的な施策なり取組をやっていく体制構築というものにふれておいていただくと、これは企画書ですから企画委員としてそういう人たちが今後ともより考えていく。もちろん資料のなかにいろいろな施策案が出ておりますが、これをどうより現実化していくのか、あるいはここには載っていないけれども新しいものをどうつくっていくのかということが大切ですので、詳しい内容ではなくて体制づくりは考えていっていただきたいと思います。

それから都心問題は、もちろんビジョンなのでそうなのですがわずかの時間で簡単にできることではございません。けれども京都の都心づくりとか、河原町の部分をどの視点から見ていくのかということは、今回は都心に関する中間報告になるかと思っております。来年以降、都心部部会でやはり京都市内における地域周辺と都心という見方も納得しなければなりませんし、もちろん大阪も、大阪はあの駅前のところからさらに開発が進んでいきますからそれとの関係で見ていかなければいけません。それからもう一つは観光ということで国際級の商業地域といえますが、中国などでは北京の王府井（ワンフーチン）は完全にそういう方針で出しておりますから、そのような意味でやっていくなれば四条河原町周辺を郊外型の商業と対応するというような観点だけに留まらないで、行政としても相当別のお金を投入していかなければならない段階がくると思っています。

そういう異質な部分でグローバルな部分を考えながら絵を描いていかないと、どうも人間関係の困難さとか伝統というものに足を引っ張られて、抜本的な動きが難しくなるだろうと思います。そのあたりの三つの側面があると思うのですが、その側面を整合させるのは非常に難しいのですが、来年度以降、考えていかなければならない部分だろうと思います。来年以降の都心の報告書を楽しみにしています。

若林委員長 ありがとうございます。以上で意見交換の時間を締めさせていただきますと思います。

今後のことについて簡単にまとめに代えてご紹介したいと思います。来週の火曜日に策定委員会がございます。これで策定委員会全体の役目がすべて終了することになります。そしてビジョンの発効主体である京都市内部での調整を経て、3月末にはビジョンとして、発効日は4月になるのではないかと思いますが発表がなされる予定になっております。ですから文言の修正はもうしばらくしていきますので、お気づきの点等ございましたらお寄せくださるようよろしくお願いいたします。それが一つ目です。

二つ目に、こういう分厚いものを商業者や市民の皆さんに読めといてもどうしようもないので、さまざまな形で市民、観光客、商業者のビジョンですから、そういう点で普及できるような仕掛を努力していきたいと思っております。またそれについてもいろいろアイデア等がございましたら、今後具体化していくことになりますのでご意見をお寄せいただくとありがたいと思います。

三つ目は、次年度このビジョンを推進していく総合的な推進体制、委員会のようなものをつくることになっております。そここのところでこの「5つの転換」とか「11の戦略」というものを一つひとつ施策に具体化をし、場合によっては実行する、ものによっては研究する。それぞれはいろいろあると思いますが、平成16年度からは部分的にせよアクションを始める。議論の期間は終わったというわけではないのですが、議論しなければいけないことはたくさんあるように思いますけれどもアクションの時代が始まるということになります。

四つ目ですが、都心部の問題に関しては田中委員がいわれた三つの角度と、私自身はとくに国家戦略として議論すべきエリアではないかというようなことを思っています。やっと課題とネットワークづくりなり、行政は行政で関連部局を調整して進めるということまでやっと具体化したところまできているわけです。より具体的な議論は次年度ということになります。都心部部会でこれまで進めてきた議論をどういう枠組でということはまだ煮詰まってはおりませんが、今年度の都心部部会をつくったことをきっかけに、次年度も検討を進めていくことを確認しております。以上、四つの方向で進めていただくこととなります。

ここで最後になりますけれども、京都市の山添商工部長から一言お言葉をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

山添委員 昨年8月29日に第1回目を開催いたしまして、今日は5回目、6カ月間に5回ということで、皆様方には本当に熱心なご議論をしていただき今日までやってまいりまして、こういう形でご意見がまとまったことは非常に嬉しい限りでございます。若林委員長さんには強烈なリーダーシップと責任感とでここまで運んでいただきましてありがとうございました。

今おまとめいただきましたけれども、一つはこのなかで商業者の皆さん、市民の皆さん、それから行政のそれぞれの役割がいわれたわけですが、やはりこうやって商業振興について深く議論をすることに非常に意義があったと思います。先ほど要約判というよう

なお話もございましたが、できるだけ広く、またそれぞれのところで議論をいただくようにそういう仕掛、仕組を考えていかなければいけないと思っております。それからもう一つは、今度は例えば「11の重点戦略の推進」のなかで、行政として何をしなければいけないのか方向性は出てきたわけですけれども、今度はこれに基づく具体的な施策についてよく考えていかなければいけないと思っております。

国も地方もお金がありませんので、どこからお金が湧いてくるわけではございません。今ある資金をより重点化してどこに向けていくかということが、このビジョンで商業の分野ではこういう方向にお金を向けていこうということが決まれば明らかになっていくのだらうと思っております。これが発表されましたら施策の問題は行政のほうで考えていくという時代ではないだらうと思っております。次年度以降の組織の話もございましたけれども、具体的な施策についても引き続きいろいろなお意見をお聞きして、決めていかなければいけないだらうと思っております。

最初の頃に KICS のお話が出ておりましたが、京都市でこれが成功して非常にユニークな制度だと思っております。これは途中のところでは行政はお金を結構投入したと思っておりますが、最初の発想は商業者の皆さんから出てきたものでございます。こういうことは非常に大事だと思っております。来年度以降、どういう形になるかはまたこれから考えていかなければいけません。ワーキング部会という形ではこれで締めさせていただきますけれども、今後ともぜひ皆様方にご協力いただきますようお願いいたしますし、お礼とお願いとということでご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

3 閉会

若林委員長 ありがとうございました。以上で本日の日程はすべて終了いたしました。最後に事務局から事務連絡をお願いいたします。

事務局（西川） どうもありがとうございました。予定の時間を過ぎておりますので簡単にご連絡させていただきます。

一点目は、2月24日に策定委員会が開催されますけれども、その結果につきましてはまた後日皆様方にご連絡させていただきます。二点目は完成したビジョンにつきましては4月に入りましてから皆様のほうに郵送させていただきます。三点目は、お手元にお配りしておりますが、コミュニティ・ビジネスの『まちで暮らす、まちに生きる』というタイトルをつけております。今日ご出席の大島委員さんにも大変ご協力いただいております。平成14年度、15年度の2年間、コミュニティ・ビジネスについて京都市でもいろいろ取組を行ってまいりました。今回3月7日の午後1～4時、京都駅前のぱるるプラザ京都でセミナーを開催する運びになっております。皆様方におかれましてはご都合のつく限り、ぜひともご参加いただきたいと思います。よろしくをお願いいたします。以上でございます。

若林委員長 本当にここまで何とかビジョンの形がまとまりましたのも、このワーキング部会、都心部会、策定委員会の各委員の皆様方の京都が大好きだとか、これをなんとかしようという思いからいろいろなお意見をいただいて、それはそれぞれ本当に非常に面白くてその都度勉強させていただきました。そういうことが全部集まってなんとかこま

でできたということで、本当に皆様のお蔭をもちましてここまで来たことを嬉しく思っております。

やっと企画書ができたということでこれからが本番だということです。それぞれのフィールドでますます皆さんがご活躍されることを期待しますし、これはこれで総合的に推進するということに、またご相談に乗っていただいたり、ご協力をいただいたりという場面もあると思います。本当にこの半年間ありがとうございました。これでこの会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。